



校友会会報

第12号

2006年1月1日

編集・発行

酪農学園大学同窓会
校友会会報編集委員会
〒069-8501 江別市文京台緑町582
同窓生会館内

☎ (011) 386-1196

FAX (011) 386-5987

HP: <http://dousoukaikouyukai.>web: infoseek.co.jpE-mail: rg-kouyu@rakuno.ac.jp

酪農学部便り

酪農学部長 岡本 全弘

酪農学部は我が国唯一の酪農に特化した学部です。「酪農」は狭い意味での酪農だけで存在できるはずもなく、周辺領域を包含することは必然であり、建学の当初から総合科学として「健土健民」を具現化するための学問的使命を持っています。学問領域の専門化にともない、動物生産科学、植物生産科学、環境情報科学をカバーする酪農学科、農業・農政および経済・市場を専攻する農業経済学科、食品の開発、利用・加工、栄養、環境・衛生、保蔵をカバーする食品科学専攻および管理栄養士を養成する健康栄養学専攻を持つ食品科学科ならびに消費経済、商品管理、流通システム、経済・経営システムを専攻する食品流通学科の4つの学科に分化するに至りました。

こうした専門化は必然ではありますが、各学科がその使命を追究し、熱心に教育・研究活動に励むほど、総合科学としての酪農学が分断され、健土健民の環が途切れてしまう危険性を孕んでいます。他大学においては、明確な理念と位置づけがないため、研究室ごとに独立王国の様相を呈し、個々バラバラに論文数のみを指標にしを削っています。本当に幸いなことに、本学はひときわ輝く建学の精神を持っており、本学部の各学科は健土健民の一環を担う誇りと責務を自覚しているがゆえに、大きな齟齬をきたすことはありません。しかし、個別の研究分野自体が果てしない深みと魅力を持つ現在では、没頭すればするほど社会的な位置づけと隔絶してしまう傾向にあるのではないのでしょうか。本学部の存在意義は建学の精神を教育、研究、社会貢献を通して具現化することにあり、そうすることによって、その他多数の大学・学部の一員に墮落することなく、唯一無二の存在であり続けることができると信じます。

本学部は特徴ある学部として、健闘していることは自負していますが、決して現状は満足できるものではありません。受験生の数も徐々に減少しています。建学の精神を継承することは、決して惰性に任せることではありません。また、無理に無理を重ねて自滅するようでも困ります。本学部のあり方を、教職員が明確な目標に向かって堅実に努力することにより、今以上に学生が満足しつつ成長し、本学部ならではの研究成果をあげ、社会貢献ができるシステムに改善することが必要です。そこで、あらためて学部全体の教育・研究体制の再検討をしているところです。

現在検討中のことであり、この場で明らかにすることができませんが、例えば酪農学科と農業経済学科では、酪農と縁が深いにも関わらず、教育・研究体制が不十分であった肉牛と畑作・園芸部門の強化を検討中であり、食品流通学科では食品と食品の流通上必要な技術教育を充実させることになっています。

現在進行中の新たな試みを紹介します。それは酪農学科の実践酪農学コースです。本学酪農学科は当初より酪農自営者の養成を目的の一つとしてきましたが、学生の修学目的と進路は農業技術者、アグリビジネス、教員、公務員、一般企業、海外協力にまで多様化しています。必然的にカリキュラムは膨大かつ複雑になってきました。これらの科目はいずれも酪農自営者にとっても重要で、問題に直面するたびに、生涯を通してその意義が認識されるはずですが、限られた時間のなかでは他にも優先的に習得したい直接的な技術もあります。

また、いわゆる座学では、その学問が酪農産業や生産技術のいかなる分野に活かされているのか、身にしみて実感しづらい側面も否定できません。そこで、酪農自営を志す学生のために、生産現場において生産技術を実習しつつ、その経験を基盤にして、厳選した学問を身につけることができる「実践酪農学コース」を設けることにしました。

このコースを修学したい学生は、1年次において通常のカリキュラムに加え、酪農現場の実情について酪農家を含め、指導的役割を担う人々から直接指導を受け、意志を強固にします。2年目の前期においては、酪農家に住み込み、実際の酪農生産を体験しつつ、電子メールを利用した授業と教員の出張授業を現地の若手酪農家とともに受講します。2年次の後期から3年次の前期までは大学において通常の授業を受けますが、3年次の後期には再び酪農家において実習しながら勉強します。また、4年次は通常の授業を受講します。つまり、通常の授業と実習ならびに実習先での授業がサンドイッチのように配置されており、実習での体験と疑問が勉学意欲を掻き立て、それが当該学生ばかりでなく、他の学生にも波及することを期待しているのです。本年は5名の2年次学生が、浜中町と鹿追町において実習しつつ勉学し、大きく成長して帰学しました。大変お世話になった両町の関係者の皆さんに深く感謝致します。

近い将来、今以上に自信と希望に満ちた酪農学部を、実績をもってご紹介できることを期待します。



獣医学部の改革

獣医学部長 谷山 弘行

今日ほど、国民の関心が「食と農」に注がれている時代はありません。BSE、O157、農薬、抗生剤、飼料添加物など「食の安全」を脅かす要因についてマスコミはヒステリックなほど声高らかに報道しています。しかし、こうした「食と農」に対する関心の高まりとは裏腹に、受験生が激減している農学系大学（学部、学科）の低迷振りをどのように結びつければ良いのでしょうか？ 農学系大学の存在意義が同時に問われているのではないかと。大学の改革が叫ばれて久しいのですが、我が酪農学園大学は？

酪農学園大学獣医学部は次世代の獣医学教育の体制確立のための改革を断行しています。すべての教室を廃止し、5部門に再編しました。臨床は、生産動物医療部門（旧一内科学教室、繁殖学教室、外科学第2教室）と伴侶動物医療部門（旧一外科学教室、外科学第2教室、内科学第2教室、）に、非臨床教室は、生体機能部門（旧一解剖学教室、生理学教室、薬理学教室、生化学教室）、感染・病理部門（旧一微生物学教室、伝染病学教室、寄生虫学教室、病理学教室）および衛生・環境部門（旧一公衆衛生学教室、衛生学教室、実験動物学教室、放射線獣医学教室、毒性学教室）の3部門に移行しました。これに教養・基礎教育担当の3研究室を加えた5部門・3研究室体制となっています。5部門には、それぞれ部門内教員から選出された部門長（教授）が配置され、教育、研究、エクステンションにかかわる運営が、部門として効率よく機能するよう指導する役割を担っています。同時に獣医学科長を補佐し、獣医学科全体の運営の遂行に重要な役割を担っています。現在、澤向 豊教授（生産動物医療部門）、泉澤康晴教授（伴侶動物医療部門）、加藤清雄教授（生体機能部門）、岩井 澁教授（感染・病理部門）、平賀武夫教授（衛生・環境部門）の5名の部門長と獣医学科長とで、学科運営協議会（通称部門長会議）を運営しています。教員組織は48名の獣医専任の教員と2名の嘱託助手、そして3名の教養・基礎教育教員の53名教員組織から成り立っています。すでに54名の獣医学科専任教員体制が決定されていますが、次年度中に具体的プランを提示し、充実を図りたいと思います。

こうした学部の改革の基本となるのがカリキュラムです。次世代に向けたカリキュラムの編成に精力的に取り組んでいます。

獣医学研究科では、文部科学省のハイテクリサーチ・センター整備事業の一環として、環境汚染物質・感染病原体分析監視システムの開発研究をテーマにプロジェクトを立ちあげています。今年が3年目に入り中間報告の年となっています。報告事業として、2つの公開シンポジウムが開催されました。1.「環境から生体に」をテーマに9月22日に開催、Dr.Theo L Peeters（リューベン大学、ベルギー）始め4名の講師をお招きし、講演を行いました。また、学内の研究参加者20名の研究成果報告を併せて執り行いました。さらに、2.「タンチョウの生息環境の変化と諸問題」と題して、正富宏之先生（タンチョウ保護調査連代表）を始め、4名の講師をお招きしたシンポジウムを10月13日に開催しました。自然環境の問題をタンチョウの生態を通して、分析、新たな視点で環境問題を捉える事の必要性が提案されました。学内外から、また獣医学科以外の学生、教職員も含め多数の参加があり、環境に関する関心の高さ、深さがうかがわれたシンポジウムでした。

最後に、2004年度の獣医師国家試験の合格率は過去最低を記録しました。国家試験の合格率を上げること、全員を合格させること、これを約束して入学を許可している以上、約束を守らなくてはなりません。個々の教員も考え得る対策を、手を替え品を替え試みてはいるのですが、なかなか実効が上らない。カリキュラムの編成も含めた教育体制の組直しが迫られています。獣医学科の部門制の導入はその一環であり、今後、マイナーチェンジではなく、次世代カリキュラムの構築も含めた抜本的改革が必要と思いますし、現在その具体策を求めて検討を行っています。酪農学園大学だけではなく、他の獣医15大学も改革の苦しみを等しく味わっています。社会の変化、国際的動きについていけなくなる可能性はどの大学も持っていると思います。水面上は穏やかでも、水面下ではいろいろの動きがあります。いまの所、獣医大学も法律（規制）によって守られていますが、規制緩和の号令の下、現体制の崩壊に至るような変革もたらされる可能性も否定はできません。既成大学の再編どころか、新規獣医大学の出現によって大きく変化する可能性も視野に入れて置く必要があるでしょう。種池哲朗学部長時代に始まった獣医学部の改革は、加藤清雄、岩井 澁両学部長の手を経て、なおその途上にあります。学部・学科のシステムの改革はとりもなおさず教職員の意識改革であることです。既成の組織に安住し変化を恐れる考えや、自己責任を回避するような言動は、組織そのものの消失につながりかねません。周回遅れのランナーにならないように、常にアンテナを張り巡らし、具体的対策を検討し、実行に移す体制の確立が必要です。40年の歴史を刻む酪農学園大学獣医学部獣医学科を継承し、かつ次世代の獣医師のリーダーを育て上げるためのアイデアと行動を具体的に体現しなければなりません。

同窓会会員の皆様のご健勝、御活躍を祈りつつ、獣医学部の近況をお伝えいたします。



環境システム学部便り

環境システム学部長 中原 准一

校友会の皆様には、日頃より環境システム学部の教育・研究に温かいご支援、ご協力を賜りまして、この紙上を借りて厚くお礼申し上げる次第です。引き続き環境システム学部について、みなさまのご指導、ご鞭撻を仰ぐことが出来れば幸いです。

2005年度は、環境システム学部にとって節目の年です。学部再編成により、待望の3学科体制となったからです。従来の経営環境学科を改めて、環境マネジメント学科が新設され、地域環境学科ではカリキュラム改正を実施しました。さらに学部第3の学科として、生命環境学科が開設されました。生命環境学科は、本学では酪農、獣医、食品科学に続く第4番目の実験系（自然科学系）学科としてスタートを切りました。同学科は104名の新入生（定員100名）を迎え、学科長の矢吹 哲夫教授以下11名の教員で発足しました。さらに教員は、2006年度中に新たに3名ほど加わり当初目標の14名になる予定です。

環境システム学部は、「環境と調和・共生する社会」の形成に資する人材を育成することを教育目標に掲げて1998年度に開設しました。以来、早くも今年で8年目を迎えました。この間、経営環境学科、地域環境学科は、2004年度までに卒業生をそれぞれ4度送り出しています。今は、5期生の諸君が卒業論文の締め切りも近くとあって、その取りまとめに大わらわです。

今年度、環境マネジメント学科長（兼経営環境学科長）に篠崎志朗教授が就任し、地域環境学科長には引き続き岩井 洋教授が就任し、それぞれ学科運営の衝にあっています。先述しましたように、本学部は今春4期生を社会に送り出していますが、それぞれの学科が地道に取り組んできた人材育成の成果が、徐々に現れてきていることです。例えば経営環境学科は、その発足時からインターンシップを採り入れ、3年次学生に夏季間の企業実習を実施してまいりました。学生諸君は、派遣先の事業所でそれぞれの企業が顧客満足度を高めるために努力を傾注している有り様を目の当たりにすることになります。

地域環境学科は、同様のインターンシップとしてやはり3年次学生を対象に地域実習を実施しています。これは、地方自治体などの出先機関（清掃事務所、公園管理事務所等々）に学生諸君が派遣されて、住民サービスの実態に直接触れるものです。企業実習や地域実習は、従事する学生諸君にとって、それぞれの人生観・社会観を涵養する重要な機会となっています。現在、企業でのインターンシップなどは、かなりの大学で採用し一般的になっていますが、経営環境学科などの取り組みは、いわばこれらの動きを方向付けたもので先駆的な意義をもっています。げんに経営環境学科では、派遣先の企業に採用内定者を、地域環境学科では道央圏の中核市の職員採用で内定者をそれぞれ出しています。

ところで国立大学は、既に独立行政法人化し、従来あった私学との仕切が無くなりました。各大学は少子化時代の真っ只中で生き残りをかけてしのぎを削っているといっても過言ではありません。わたしは、酪農学園大学は、明確な建学の理念を有し、それを体現した個性的な学生諸君を輩出していることで社会的評価をいただいていると受け止めています。しかも、学園の創立者・黒澤西蔵は、その青年時代、田中正造に師事し足尾銅山鉱毒被災民救済に身を挺して闘いました。2005年は、黒澤生誕120年、そして黒澤が田中の許を辞して渡道し、宇都宮仙太郎氏の牧場で牧夫として酪農界に身を捧げてちょうど100年目にあたります。わたしは、黒澤の掲げた「三愛精神」「健土健民」の理想が100年の時空を超えて環境システム学部に新たに加えられたと受け止めています。

本学部の生命環境学科は、自然環境の常態を踏まえながらその異変と思われる事象を客観的・自然科学的に解明する役割を担っています。あたかもそれは、環境（異変と思われる事象）を診断する医師の役割と言い換えてもよいでしょう。地域環境学科は、その「診断」にもとづいて、解決の方途を地方自治体や地域団体の人為的な側面に焦点をあてて人文社会科学的に解明していく役割を担っているといってもよいでしょう。環境マネジメント学科は、先述の「診断」にもとづいて経営学やマーケティングの手法を駆使して環境保全型の企業や産業のあり方を解明していく役割を課されているといってもよいでしょう。

校友会会員の皆様のご健勝をお祈りしますとともに、3学科体制をスタートさせた、環境システム学部につきまして、なお一層のご支援・ご鞭撻を賜りますよう心よりお願いしまして、ご挨拶とさせていただきます。

第14回 ホームカミングデー開催

第14回ホームカミングデーが2005年6月25日（土）黒澤記念講堂に於いて開催されました。山口宗教主任の礼拝、高橋連合同窓会会長と中川白樺祭実行委員長のご挨拶があり、卒業生である三愛畜産センター所長 生出正実氏による記念講演を行いました。「乳と蜜の流れる郷を目指して」と題し、ご自身の経験を基に酪農学園の建学の精神である三愛精神の実践を提唱されました。

「ホームカミングデー」とは卒業生や旧教職員が母校に集う日です。できるだけ多くの方に参加していただく為に、遠方からも参加しやすい日程を設定しようと、2006年度は秋の3連休の初日である9月16日（土）に開催することを決定いたしました。多数ご参加されますことを心から願っております。



記念講演をされる生出正実氏

同窓会校友会事務局長挨拶

校友会事務局長 加藤 清雄

同窓生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。お元気で、気持ち新たに新しい年を迎えられたことと思います。大学同窓会校友会の事務局を仰せつかりました獣医学科獣医生理学教室の加藤でございます。微力ではございますが、大学同窓会の円滑な運営と発展にお役に立てるよう努力する所存ですのでよろしくお願ひ申し上げます。

これまで、同窓会への関わりは出身学科である獣医学科同窓会の活動が中心でしたので、大学全体の同窓会をまとめた組織である校友会の事務局を担当するようになり、校友会はどうあるべきなのか、などと考えることがあります。大学における同窓会活動の単位は大学の構成単位である各学科の同窓会であり、会報の発行をはじめとする同窓会活動は単位同窓会により行われるのが望ましいと考えております。組織が大きくなれば構成員一人一人の組織に対する帰属意識が薄まる傾向にあります。「会員相互の親睦と母校発展への貢献」という一般的な同窓会の趣旨を考えると、帰属意識が失われない規模の単位で活動を展開することが継続につながるものと信じております。

年に一度発行している校友会会報はどのような役割を担うべきなのでしょう。出身学科の近況や同窓会の活動状況は各学科の同窓会誌により知ることができそうですが、他学部、他学科の近況や同窓会活動状況はなかなか知り得ないのではないかと思われまふ。そこで今年度の会報は、大学3学部の学部長にたっぷり学部近況をご紹介いただき、今後の抱負をご披露いただきました。ご出身の学部学科だけでなく、酪農学園大学全体に関心を寄せていただき、より一層のご支援・ご協力と叱咤激励を賜りたく存じます。

また、校友会が中心となって行ってきた行事の1つにホームカミングデーがございます。このホームカミングデーは同窓生にとっても酪農学園の発展にとっても重要な行事であるという認識が高まり、校友会ばかりでなく酪農学園、酪農学園同窓会連合会、酪農学園後援会の共催により開催されるようになり、来年度はさらに貴農同志会も共催に加わることになりました。事務局としては、この日に酪農学園を訪問すれば恩師や多くの同窓生に会えることを保証できるようにしたいと思い、今期事務局長に課せられた最大の課題であると肝に銘じ全力で取り組みたいと思っております。皆様のご協力を心からお願い申し上げます。

2005年度酪農学園同窓会校友会理事・代議員会報告

5月21日（土）新札幌アークシティホテルにて2005年度同窓会校友会理事・代議員会が開催された。（出席者25名、委任状35名）石田校友会会長を議長に選出し、以下の議案について慎重に審議し承認された。第1号議案：2004年度事業報告、収支決算、第2号議案：2005年度事業計画、予算、第3号議案：役員改選、第4号議案：事務局運営規定改正。新校友会事務局長に加藤清雄氏（獣医5期）が就任されました。

会計報告 2004年度決算および2005年度予算について下記の通り承認された。

収 入		(単位:円)	
項 目	2004年度決算	2005年度予算	
前年度繰越金	9,735,452	9,919,125	
分担金	2,796,000	2,850,000	950名×3000円
利息	1,480	1,500	
助成金	10,000	10,000	
ホームカミングデー助成金	146,200	150,000	共催団体より
雑収入	28,000	0	
合 計	12,717,132	12,930,625	
支 出			
項 目	2004年度決算	2005年度予算	
会議費	104,406	100,000	理事・代議員会他
連合同窓会	640,200	640,200	負担金
在学生関係	100,000	150,000	白樺祭支援他
会報関係	221,900	250,000	印刷代他
ホームカミングデー費	194,542	200,000	
シリーズ小冊子	147,890	100,000	印刷代、郵送料
コンピューター費	23,457	100,000	HP更新他
人件費	1,172,996	1,200,000	事務局長手当含
通信費	40,133	50,000	電話代、郵送料
旅費交通費	52,880	50,000	理事・代議員会交通費他
慶弔費	10,000	50,000	
事務用品費	33,967	70,000	
消耗品費	23,911	20,000	
雑費	31,725	30,000	
小 計	2,798,007	3,010,200	
次年度繰越金	9,919,125	9,920,425	
合 計	12,717,132	12,930,625	

2005年度校友会役員

会 長 石田 貞夫（酪農1）
副会長 野村 武（獣医1）、木村栄之進（農経5）
事務局長 加藤 清雄（獣医5）、他理事、代議員、監事

2005年度各学科同窓会事務局長

酪農学科 野 英二、農業経済学科 加藤 浩、
獣医学科 加藤 清雄、食品科学科 岩崎 智仁、
食品流通学科 西田 智、地域環境学科 吉田 陽平、
経営環境学科 大野 真弓

事務局だより

各地で集う同窓生の様子を校友会のホームページに掲載していますが、学生時代を共に過ごした仲間は、長い年月を隔ててもすぐに昔に戻って楽しく語り合えるものだ、その笑顔を見て感じます。同期会ははじめ支部同窓会等で酪農学園の輪が広がるといいですね。

同窓会開催案内の為に住所変更等がありましたら事務局へご連絡ください。（S・K）